

故田村専一郎先生旧蔵「支子文庫」報告

今井，源衛
九州大学教授

中野，三敏
九州大学助教授

大内，初夫
鹿児島大学教授

<https://doi.org/10.15017/12108>

出版情報：語文研究. 43, pp.44-61, 1977-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

故 田村專一郎先生 旧蔵「支子文庫」報告

九州大学国語国文学会有志

田村專一郎先生が一昨年(一九三四年)の八月十二日に逝去されてから早くも満二年近くが経った。あのように俄かな出来事で、一部の新聞にはセシシーヨナルに報道されたこともあって、今なお記憶になまなましい方々も多いであろう。ことに先生は、本務は教養部であったが、長らく文学部にも出講していただいていたこともあり、九大国語国文学会にとっては、文字通り創成期以来の恩人であられた。二周忌を前にして、痛恨哀悼の思いのひときわ深まるのをいかんともしがたいのである。

先生は備前岡山の旧家に生れられ、旧制一高を経て、大正十五年東京大学国文学科を卒業され、間もなく旧制福岡高等学校に御来任、以来五十余年間博多の地を愛して離れず、その間に父君の遺産と大学の俸給の大半を書籍と美術品の購入に投じ尽くされたのであった。

田村先生の文庫の名は「支子(くちなし)文庫」である。先生の用いられた蔵書印は、他に「遙青秘符」「遙山麓舎」「遙山房」もあるが、最も愛用されたのは「支子」「支子文庫」「支子舎」である。夏六・七月のころ、艶やかな濃緑の間に純白の花弁を五六枚、その

中央にほんのりと黄色い雌しべがのぞいて、しめやかな芳香をあたりいっぱいにただよわせる、その清雅の風情を愛されたのだが、そこには軽々しい思いつきの類を次々と活字に移して恥じぬ輩への激しい嫌悪も秘められていたように思われる。俗を忌み、読書と芸術とを愛することにおいて、先生は文字通り、素渾たる昭和五十年代最後の文人であられた。

「支子文庫」約一万冊は、先生御生前からの御希望に添って散佚することなく、御不幸後間もなく九州大学図書館に寄託され、今日まで引き続きその整理が行われているが、一部の書籍については既に購入・登録手続きも終っている。この決定については、先生の御遺志とともに、御遺族の九大に対する深い御理解・御好意があったことはいうまでもないが、教養部関係者あるいは大学当局の行届いた配慮のあったことも忘れることはできないのである。

さて支子文庫の整理調査はまだ終ってはいないが、その中和本の古典関係書籍については、図書館より協力を求められたので、学生諸君の協力を得て、昭和五十一年三月以降調査を重ねてきた。目ぼしい典籍についてはすでにあらましの見当も付いたので、ここに中

間報告を兼ねて概要を述べたい。

なおついでに当初から文庫全般の整理・調査に従った者の氏名を左記に記しておく。

今井源衛・中野三敏・工藤重矩・中島あや子・瓜生清・稲川順一・白石良夫・赤塚正幸・矢野準・花田俊典・崎村弘文・秋吉望・田坂憲二・和田直樹・中条順子（敬称略）

また本稿の執筆は研究室員としては今井・中野が当たったが、他に特に大内初夫氏にも依頼して労を煩らわせた。氏は田村先生の御生前から、つとに支子文庫中の俳書群について調査研究を重ねて来られた故である。記して感謝の意を表したい。（今井記）

一

大和物語 升（二五・五×四・二種）一帖。特に先生御生前の御寄贈にかかるもの。鎌倉時代写。勝命本正治二年光阿弥陀仏奥本転写。通行一三四段より一七二段までの零本。この本については、次ぎの拙稿を参照されたい。「支子文庫本『大和物語』のことなど」天理善本叢書月報昭和五十一年七月。「故田村専一郎名誉教授旧蔵支子文庫本『大和物語』について」九州大学附属図書館報図書館情報 Vol.12 No.1。「支子文庫本『大和物語』について（上）」文学研究第七十四輯、昭和五十二年三月。なお同（下）は文学研究第七十五輯に掲載予定。

伊勢物語 四部をかぞえる。その一は、大（二二・三・五×一六・七種）二帖。袋綴。近世初期写。表紙は紺布地小紋ちらし文様、料紙は楮紙。墨付、上三五丁、下四三丁。天福本か。後述する「自讃歌」の函書に「光広卿伊勢物語 蟻川新右衛門自讃 歌書二 可児家珍藏」

と記しており、元来はその函に収められていた。しかし、光広の筆ではない。内外題、奥書ナシ。

その二は、升（二六・七×一八・〇種）一帖。近世初期写、綴帖。料紙鳥の子。表紙原装、茶色緞子唐草花文様、墨付六二丁。奥書、勸物なし。本文は定家本系。古筆（香山）は山本勝忠（二六四四年歿）とする。

その三は、升（二六・五×一六・七種）一帖、近世中期写、綴帖。料紙鳥の子。表紙原装、縹色金網緞子菊唐草文様。墨付六九丁。卷末に写者の識語「依或人所望染筆訖。藤原喬任」とある。本文は定家本系。勸物なし。箱書「広橋殿 伊勢物語」。田村氏の印記の他に、「矢野藏書」（朱・角）の印記がある。

その四は、奈良絵本、大（二四・三×一七・八種）二卷二帖、綴帖、近世中期写。鳥の子料紙。表紙原装、紺地遠山雲霞描、下部に金沙子遠山海辺文様、墨付上四八丁、下六三丁。本文は天福本。絵は上二五面、下二四面。すこぶる美麗な本である。奥書は、

伊勢物語新刊 世酷多矣。然京極黃門一本之奥書云 此物語之根源古人之説々不同云々 而今以天福年所被与孫女本正之、猶恐有字画之差互□加訂校 又因卷中之趣而分爲上下 蓋爲令好事童蒙悦目也、於戲予老懶衰憊而不堪弁鳥焉 豈無紕繆 博言君子後匡焉幸甚

この奥書は写者自身のものではなく、その転写であろう。

〔伊勢物語聞書〕 内外題ともになく、仮題である。大（二四・〇×一九・五種）一帖。綴帖。料紙鳥の子。墨付八三丁。内容は巻頭より六三段「つくも髪」までの注釈で、いわゆる当流抄の一であるうか。巻頭は、

伊勢物語と云事 就題号云所

一、男女物語と云説を不用。伊勢か筆作をもて此物語の題号と定らるゝよし見えたり。されは当流は此儀也。

一、伊勢か筆作に置てある説字田の御門へ奉るよしをいへり、当流には是を不用。

一、当流にたつる所は伊勢と云女七条の後の宮へ業平一期の事をかたりたてまつるをしるせりと云。さるによりて伊勢物語と定めたり。しかあれは此間に業平が自筆の記も有へし。只物語なからと見侍へき也。されと源氏物語のやうにはあらすと云。業平一期の事をかけり。中にせうく古き歌などもよせて書たり。皆作物語のさほうなり。

なお、表紙や巻末余白に「はしもと町 紐屋市松」・「森下町一日市屋イチサフロウ」など、同筆の署名や和歌、あるいはいたづら書きがある。旧蔵者の手蹟であろう。

竹とり物語 大(二四・二×一八・〇巻) 二巻二帖。奈良絵本。近世中期写。綴帖。料紙鳥の子。表紙金縷緞子、花鳥文様。墨付、上巻二四丁、下巻三三丁。絵は上巻七面、下巻六面。本文は流布本系。奥書なし。上下各巻々末本文は散らしがきにしている。

源氏物語 横(二五・五×二・七巻) 二九卷二九帖・零本。近世初期写。表紙は原裝。薄茶無地紙。綴帖。料紙は楮紙(匂宮は斐紙)。内容は、夕顔・末摘花・花の宴・賢木・須磨・明石・絵合・松風・薄雲・少女・玉鬘・初音・胡蝶・螢・野分・御幸・真木柱・梅枝・若菜下・夕霧・御法・匂宮・橘姫・椎本・宿木・東屋・浮舟・竹河・柏木の各巻である。大部分同筆だが、花の宴・東屋などは別筆らしい。また「紹巴以本句切朱点一校了」(玉鬘巻末)などの識語があ

る。底本は肖柏本系統らしいが、それを大島本系統本で訂正したところが多い。朱による句読点は、紹巴本によったもの。田村氏の印記の外、「河合氏藏書」印がある。

噴花抄 大(二四・〇×一七・〇巻) 七巻七帖。綴帖、近世初期写。表紙原裝、藍紙に金砂子散らし野山草花文様、鳥の子。丁数は巻一以下、一〇一・八七・八五・一一四・一一二・一〇〇・六一。第七巻々末に、永正七年実隆の「右肖柏老人聞書借請之」云々の奥書、永正七年八月十七日実隆の「此抄去六月下旬立筆今日終書功」云々、永正十六年冬実隆「此抄為愚見卒尔写置処(下略)云々等の奥書をすべて具え、それで終る。概ね「翻刻平安文学資料稿」本に同じだが、講釈日数の記述はすべて省いている。

保元物語 大(二四・二×一七・五巻) 三巻三帖。近世初期写。綴帖。料紙鳥の子。表紙は改裝されており、藍地紙に雪霞描沢辺文様の嫁入本の態裁である。墨付、上七六丁、中九八丁、下七二丁。上・中巻々頭に各系図あり。本文は異本系甲類本。中でも金刀比羅神宮本に近いが、それに比べて、漢字が少く、仮名書きが多い。最善本の一とするに足るか。

つれづれ草 大(二四・九×一七・七巻) 一帖。綴帖。巻頭より一三四段の途中までで、以下は逸。室町末期写。内・外題ともにない。表紙は原裝で、鶯茶の布に丸に三巴文様。料紙鳥の子。墨付一一一丁。一面七行。書入、ミセケチ等なし。各段頭に朱の合点。本文の系統は王堂本・陽明本に近いらしいが、未詳。末尾の欠は惜しいが、注目すべき一本といえよう。

万葉聞書 大(二四・四×一八・二巻)、二〇巻上中下三帖。綴帖。近世初期(寛文元禄頃)写。縹色、布目紙表紙に草花文様。内

題には「万葉集第二」等とあり、外題（扉簽アリ）に「万葉聞書」と記し、さらに下冊、第二〇巻々末には「万葉集注釈第二〇巻」と記している。料紙は鳥の子。上冊（巻一〜七五四丁・中冊（巻八〜十三三八丁。下冊（巻十四〜二〇七九丁。奥書なし。本文中、声点を少々付する。内容は簡単な難語注である。項目数は第一巻五五、以下八六・七四・六六・五七・六六・八五・三六・七八・三九・八四・三六・六六・二三七・四二・一一〇・八二・七九・六七・一三六で、計一五八一項である。訓義を施すのを原則とするが、訓だけで、釈義はないものもかなりある。「仙覚・由阿」と注する箇所も見えるが、同系統本の有無を他に知らないのので、左に巻頭・巻末を抄記する。

（巻頭） 万葉集第一

名告抄根 名をつけよなり さねは言のたすけなり

御執乃 御たらしなり

朝布麻須等六 朝狩に鳥をふみ立つるなり

（二〇巻々末）

伎美我許乃之麻 池の中嶋を君の作しといふ也

伊夜之家余其騰 いやしきりなり

古今和歌集 大（二三・五×一六・二冊）、二〇巻一帖。室町期写。綴帖装。表紙は原装。柴と緑・黄の堅縹文様綴子。見返しは金砂子散らし。料紙薄様、墨付一六七丁、白紙は巻首一丁巻尾二丁。一面九行書き。本文と同筆書入少々あり。巻末一五八丁裏面に、

此古今奉附属良守上人了

文和二年三月十八日

西方行者頼阿

と記され、宮内庁書寮部蔵頼阿本と同系統本である。西下経一氏『古今集の伝本の研究』八三ページに掲げる頼阿本の独自異文「しるき鳥のはしとあしとのあかき」「恋ひずしもあらぬ」「又のあした（にナシ）人やる」「まかり通ひて」は本書にも一致する。

なお、函蓋の裏に、「此帖頼阿法師之筆後定家抄貞応本百三十年西距今六百六十年 殊法師筆蹟中兼備年号署名者蓋稀 誠足為珍/昭和甲申（十九年）春日荒陵山人/いみしくも遠き昔を忍ふかな四つひしりの水茎のあと/八十二寿老（生カ）「荒陵文庫」印アリ」とあるが、本書の筆蹟は、署名などは頼阿のそれに似た所もあるが、全体としては、別人の筆であって、時代も下るようである。書陵部本は室町中期写で貞応本の最有力資料とされるが、本書もそれに匹敵する重要資料である。

別に古今和歌集一冊があるが、これは第十一巻〜二十巻の零本である。袋綴、近世中期写、本文は貞応本系か。墨付一三二丁。朱注・勘物・校異の書入が多く、第十五巻々末には、「阿の定三本・清一本・九内本・壬生一本・俊本」など、校合本の名称が記されている。奥書はない。

金葉和歌集 大（二三・七×一六・七冊）、一〇巻二帖。綴帖、表紙は薄茶布地金縹綴子、牡丹唐草文様。料紙鳥の子、墨付、上五二丁・下六二丁。一面十行書。本文は二度本系の流布本。奥書は、「右金葉和歌集依所望染禿毫令書写畢/元禄戊寅（十一年、一六九八）仲春日 従三位源博」とあり、筆写者のものであろう。

千載和歌集 大（二六・〇×一八・二冊） 卷十一〜二十のみ、一冊の零本。綴帖。近世初期写。表紙は藍紙。料紙は鳥の子。一面十行。奥書、書入等はない。

新古今和歌集 卷一―六、大(二九・四×一九・〇)一帖。零本。室町中期写(伝細川持之筆)。綴帖。表紙は原装、黒地金縷緞子、小紋散らし文様。見返し金泥。墨付七五丁。一面十一行。付点、書入などなし。本文系統は未詳だが、切出し歌の、春下「ふるさとに花はちり……」「いかにせんよにふる……」は見えない。扉の白紙に、古筆家の朝倉茂入の極札が貼付され、「細河殿持之、新古今上巻端本序より第六まで」とある。持之は嘉吉二年(一四四二)に歿しているが、書写年代はほぼその頃とおぼしく筆蹟雄勁、大ぶりの古雅な一本である。

新古今和歌集 升(二〇・五×二六・三)一帖。内題はかく記すが、表紙打付書の外題は「新古今聞書」とある。表紙は改装されて、金茶無地の粗末な紙表紙。墨付一三八丁。近世中期写。東常緑の聞書である。書入・朱注多く、「文政十年ニテ五百九十九年」云々ともある。玄旨(幽窓)の「右一冊東野州抄出之歌いづれもかたはし有之」云々に続き、中院通勝の「此注養遍所持之乎於城抄 山科の郷之普請場一覽之次写之／文禄五年六月上旬／也足子素然判」の奥書、さらに最末遊紙の左隅に「飽睡軒三心」(別筆)と旧蔵者らしい名がある。

八代集部類第十九 升(二七・〇×一六・五)一帖。鎌倉末期写。古筆(在・了仲・了頼のいずれかである)の極札には、二条為明筆とす。綴帖。鳥の子料紙、表紙は改装され、藍地緞子、小紋文様。金銀泥見返し。墨付二二六丁・一面一〇行、和歌二行書き。全体に亘って裏打補修されている。八代集の哀傷歌を部類したもの。巻頭に目録がある。初めの「寄四季哀傷」は春九題(子日・霞・鶯・若菜・梅・花・帰雁・藤・秋)、夏四題(歌題略、以下同)、秋十五題・冬五題であ

る。以下、天台(五題)・地儀(七題)・植物(四題)・動物(三題)・人倫(二題)・人跡(二題)・人事(二題)・雑物(二〇題)で、全歌数三八二首。巻頭は公任の「たれにかとまつをもひかむ」、巻末は慶應の「なき人のあとをたにとて」で終る。旁注・校異(墨)・朱による集付・合点・ミセケチあり。

なお弘文荘 待買古書目第廿号(昭和二年六月刊)に、「八代集部類抄巻第六」が掲出されている。伝冷泉為相筆、鎌倉末期古写本で、半紙本。代価四万円。その巻頭一葉の写真には、「八代集部類抄第六、冬／初冬／拾遺」と始まり清原元輔の歌を掲げている。筆蹟は本書とやや異なる。反町氏の解説を抄出すれば、

八代集部類抄は從來全く知られざりし書、此の一帖の外世に伝はらざる稀観本なり。(中略)加藤正治博士蔵の「佚名抄」の内、鎌倉中期頃迄に成立せし各種の私撰集の名称を上げたるが、内に

八代抄 中務卿親王撰

とあるは、或は此の書に当るべき歟。中務卿親王は即ち宗尊親王の御事なれば、時代はまさに相当とすべし。

さてこの書は(略)全巻はおそらく古今集の部類に従い二十巻たりしものなるべく、冊数は一巻一冊として二十冊に及ぶ大部のものならん。内容記載の方法は更に細かく部類分けして、初冬・時雨・霜・雪・寒草・千鳥・氷・水鳥・冬月・五節・網代・神楽・鷹狩・炭竈・炬火の十六種の標目を掲げ、各標目毎に一々勅撰集の名をあげて類歌を纂む。所収の歌数は約五百、墨付紙数は百九枚に及ぶ。諸所にイ本との校合書入あり。(下略)

国書総目録によれば、この本は現在穂久迹文庫に収まっていたらしい。この穂久迹本と支子文庫本とが、同一部に属するか否かは内題の記しかた・筆蹟・書型の相違もあって問題であるが、もし、同系統本であると認めてよいなら、田村本の出現によって、この反町氏の推察は「八代集部類」の原本の部立てや巻数など、ほぼ的を射たものであったことが立証されたといえよう。

拾玉集

大(二四・〇×一七・六) 二帖。巻分けせず、内題はない。

綴帖。料紙鳥の子。近世中期写。金茶地行成表紙。筑土鈴寛氏、文学昭和九年一月号に紹介されたものと同じく異本系の一本。上冊は百首和歌、花へ山たかみ峯の桜の」から祝へ君が代にちとせくらへを」まで、下冊は「序品六首、如是我聞へいはしみつ今いふ人の」からへとにかくに見てもなつさふ」まで。そのあとの奥書は、「右慈鎮和尚御詠等採撫舊仰慶運／令類聚之、斯言若墮将来可悲云々今 任先賢之金言令集祖師玉章、偏／存真俗一致也、肯莫貽内外異端之嘲、干時嘉曆三年五月廿一日難波津末流我立袖不才く記之」、この奥書に続けて、慶運の歌二首「あひてあひて」「もしは草むかしの跡に」と、その返歌「いにしへの玉もひかりを」「しるへする友そ嬉しき」が付載されて終る。筑土氏紹介の神宮文庫本の所在不明が伝えられる現在、注目すべき一本といえよう。

宮内卿家集

半(二二・〇×一六・七) 一冊。近世中期写、袋綴。表紙は原装、黒無地紙。料紙は楮紙。墨付二四丁。歌数一九五首。内容は「二条大皇太后宮大式集」である。奥書はなく、書入が少々ある。統大親本と同系で、最末の一首「頼めしを」を欠く。末尾二葉は、錯簡本を写したと見えて、逆順である。

新勅撰和歌集

大(二四・四×一七・六) 五巻一冊。袋綴。巻

十一～十五のみの零本。近世中期写。料紙薄様。表紙は逸失。墨付八六丁。流布本系か。

和歌三部抄

升(二八・五×一八・〇) 三巻一帖。綴帖。表紙は

原装、藍紙、水流文様。墨付三七丁。一首二行書。内容は、詠歌大概・未来記・雨中吟十七首・百人一首を収む。巻末識語は、

此三部抄者依防州山口教松所望染墨筆者也

慶長十九曆林鐘上旬 法橋玄仲(花押)

これは書写者の識語と認めてよい。外題(題簽)にも、「法橋玄仲」と注している。

自讃歌、大

大(二四・〇×一六・九) 一帖。東常縁の自讃歌抄である。

室町末期写。綴帖、料紙楮紙。表紙は原装、金茶地、金網綴子、鳳凰牡丹花文様、墨付四一丁、一面九行。歌数一七〇首。一首一行書。序文も奥書もない。巻頭に「自讃歌作者等注」として、後鳥羽院以下十七名の出自を簡単に記す。巻頭「桜さく」の歌の注は「後鳥羽院の御製女房ともあり帝王の御歌をは是非をさためぬ事也遠花はあかぬ物なり 俊成卿の九十の賀の御歌とも」。巻末「山里に」の歌の注は「いまはうれしきによりよき事をは他にあたへたきのことろなり」とある。包紙には「外題 菊亭内大臣御筆／自讃歌 嵯川新右衛門尉親当筆」とあり、扉に貼られた鳥山牛庵の極札にも嵯川親当とする。親当は、統頼従三九四所収正徹の「詠百首和歌」の筆写者である。また函蓋の表に「可児家珍襲」とあり、蓋の裏には「大正七年極月於龜城山下／斗籠居士簽」とある。

〔自讃歌抄〕

半(二二・二×一五・九) 一冊。永正九年写。料紙

は楮。表紙は失われて、大和綴じである。奥書は、「右之歌書事任本書之／色々御審心多かるへく候／少も筆者之無裁度候」(署名)

りぬす) / 永正九年霜月十八日書之」とある。写者の識語と思われ
る。内容は、東常縁の自讃歌抄であるが、前項とは大違あり、巻頭
「桜さく」の歌の注は、「永日なれともみしかくおもひてあかぬ色
なり、遠山鳥のしたり尾とはなかくしといはぬため也(マヤ) これをは
つひ / 山鳥の尾のしたり尾とは / とくなかきを也
本歌に人丸あしひきの山鳥の尾の(下略)」とあり、巻末「山里
に」の歌の注は、「山庵に引籠て昔をおもへは色々うき香にめてて
花鳥風月のみを友とせし事くやしきとなり 我ことく世をいとてん
友もかなくやしかりし昔をかたりなくさまんとなり / 一、うき世い
とはんとは思心は詩人かんになき人となり、我はいやしき山賊とな
り さてこそうき世いとはん友もかなとなり」とある。

さらにこれに続く巻末附載発句他は注目されよう。「正月廿五日
梅は世のにこりにしまぬ句哉 政資(私注・細川政資か、明応頃の人)」
以下、「花と見て雪やにははん冬梅(友色)」まで十二句。作者名
はこの二人のみ。さらにこれと前記の「右之歌書」云々の識語を距
てて、その裏面に「佐州にての連歌」と記して短連歌一首と短歌三
首を書き留める。後者は「三条西殿(美隆カ)」として「池上春風 /
浦ちかくよりて帰らんしら波のこやのあし垣夕かほのはな / 三月三
日御歌 / 仙人の折しそ思ふ一枝の分て色こき桃のくれなる / 御返
歌宗綱 / 言の葉の花よ色かふみ□ねの詠めはつきし春毎に見む」。

「宗綱」は松木宗綱か。

神祇和歌 半(二〇・〇×一五・五種)一帖。零本(後半巻)。室
町中期写。綴帖。表紙・裏表紙とも失われている。墨付一七丁。白
紙ナシ。天地を改装に際しやや切り詰めたらしく、下端の文字が読
めない個所が多い。一面十一〜十二行。和歌二行書。諸神社毎にそ

れにまつわる和歌を集めたもの。伊勢・宇佐宮・男山・石清水・賀
茂・斎宮・貴船・春日・日吉・山王・北野・稻荷・熊野・那智・香
椎宮・諏訪・三輪明神・萬城神・玉津嶋・出雲大社・鹿嶋の二十一
社。内題の「神祇和歌」は巻頭に位置するが、第一くくり三枚の中
の、第一丁は破れて失われているので、これが原本の巻頭か、否か
は正確には分りにくい。しかし、単なる部立てならば、「神祇和
歌」という改まった標出のしかたは、不自然と思われ、やはり、破
れ去った第一丁は、表紙か、扉の類であったと見たい。歌数は全一
四四首。巻頭の和歌は、伊勢で、「跡たれて幾万代の宮柱八十年は
過ぬ□なみ」巻末は、破損のため読み難いが、鹿嶋で、四首中の
初めの歌は、「色かへぬ松原松むら霽置て神のかしまは代々の
□」。この「松」の右に「杉」、「置」の右に「ヲへ」と校異を
記している。国書総目録によれば、「神祇和歌」なる書名は他に見
当らない。

宝治歌合 大(二六・七×一九・二種)二巻二帖。綴帖。近世初期
写。内題にかくあるが、いわゆる「後嵯峨院歌合」である。表紙打
墨料紙。本文料紙は楮紙、色替り。墨付、上巻二八丁、下巻四〇
丁。本文は類従本を補正すべき個所が若干あるようである。末尾に
続けて、勝負の目録を掲げる。さらに巻末に連性陳状を附載するが、
末尾は「御披露の後にはひき破らるべく候あなかしこ」で終り、以下
はない。田村先生の印記以外に「北畠文庫」(朱方印)印がある。

弘長百首 大(二五・五×一八・〇種)一帖。綴帖。近世初期写。
表紙緑布地、雷文繁牡丹花文様。鳥の子料紙、墨付四二丁。外題は
ない。

歌枕名寄 大(二三・七×一六・二種)八巻二帖。但し、巻二十一

二十四、二十九、三十二のみの零本。近世中期写、綴帖。料紙薄様。墨付、上一三二丁、下一二八丁。表紙脱。扉（現在の表紙）に紙片を貼り、目錄を記す（田村先生の筆蹟である）。内容は、上冊巻二十一 は武蔵から常陸まで東海部、二十二～二十四は近江、下冊巻二十九 は北陸部、巻三十は山陰部・巻三十一～三十二は山陽部。本文中、校異・左注・旁注等あり、欄外に頭注集付あり。上冊末尾に謙語、「従白雲以下至益原里者写本落之他本校合之時書入之 仍次第不同 皆一所載之了」。

〔歌枕名寄〕 大（三・五×一六・二）一帖。零本。近世中期写。綴帖。墨付一五四丁。料紙楮紙。表紙・裏表紙ともに逸。歌枕をいろは順に配列、「石蔵」から、「し」の途中「白菅湊」までで、以下は佚している。（今井記）

江戸文芸もしくは江戸時代板本類は、先生の御専攻からは若干はづれるものゆえ、御集書に当たってもそれほど意を用いられたものではなかったらしい。いわば御趣味の範囲において集められたものゆえ、特色は一に九州俳書を中心とした連歌俳諧の一群と、二に法帖、画譜等の美術書がやゝ纏ったものであったようだが、連俳書に關しては、先生御生前からの御縁故もあって、特に大内氏に御願ひして紹介の文章を記して戴いた。美術書類は軸物類と共に北九州美術館に寄託されたので、何れその内容の発表もあろうかと思われる。こゝではその他の書籍の中から若干を選んで報告する。

先づ古活字本が十二種四十一冊を数える。

六韜 大本一冊。栗皮表紙。八行十七字。慶長五年刊。所謂伏

見版の二で、初板は慶長四年のものであるが、この五年板は川瀬一馬氏の「増補・古活字版の研究」（以下「研究」と略記）にも、この田村本を孤本として著録する。

三略 大本一冊。栗皮表紙。八行十七字。慶長五年刊。前記「六韜」と同時の刊行であることは、その書型からみて間違いない。これも「研究」に足利学校遺蹟図書館本とこの田村本の二部のみが記されている。

練錦織段 大本一冊。栗皮表紙。九行。慶長刊か。「研究」記載のものと同種。

増鏡 大本六冊。黒色表紙。十二行。「研究」に慶元活字版として記載のものと同種。但しこの田村本には第一冊目を除く他の五冊に、それぞれ表紙左肩に、本文と同種の活字を用いて「ます上末」「ます中本」「ます中末」「ます下本」「ます下末」と印刷された、縦六欄、横一・五欄の短冊型の小紙片が貼布されている。これもやはり題簽の一種ではあるが、「弘文荘古活字版目録」にはこの田村本と全く同種の「増鏡」に通常の立派な題簽が六枚完備したものを掲載しており、田村本の様な事例は筆者の管見には入らない。

枕草子 大本四冊。丹表紙。十三行。巻五の一冊を欠く。「研究」に第三種の八種の一として田村本も著録される。

国清百録 大本四冊。朽葉色表紙。十行。「唯心院蔵」の朱印あり。「研究」には天海版一切経の内の一かとして、田村本も著録される。

十不二文心解 大本一冊。改装。十行。「研究」に著録される。

栄花物語 大本十六冊存。(四冊欠)。栗皮表紙。十一行。欠は巻三、四、五、六、廿一、廿二、卅五、卅六の八巻四冊分である。

「研究」に著録される。

新古今和歌集 大本一冊。上巻のみ存。丹表紙。十行。「研究」に言う第二種本にあたる。

源氏小鏡 大本一冊。中巻のみ存。丹表紙。十二行。「研究」に著録される。

武家諸礼集 (小笠原七礼) 大本四冊(三冊欠)。紺表紙。十二

行。「光顔著」の黒印あり。「酌之次第」「通之次第」「元服之次第」「書札之次第」の四冊分存。「研究」に言う慶元中刊十二行本にあたる。各丁表ノドの部分に「一の」「」の如くに上部に巻数、下部に丁数を印刷する。

武家諸礼集 大本一冊。「通之次第」の一冊のみ。黒色表紙。十二行。「研究」に言う元寛活字十二行本にあたる。前項のものに見えるような巻数・丁数の印刷がない。

古活字本以外に特記すべきは次の一本である。

〔延宝三年踊唄〕 升形に近い小本の写本三冊。何れも共紙表紙の仮綴じ。初めの二冊は表紙左肩に「上」「下」と墨の打付書あり、墨付は上が十七丁、下が十四丁。三冊目は表紙中央に「やよふし」と墨の打付書あり、裏表紙に「ゑんほう三ねん／三月吉日」と墨書。墨付は三十二丁半。

この書は早く「国学院雑誌」昭和七年三月号に、当時田村先生の同僚であられた安田喜代門氏によって「延宝三年踊歌」の仮題で新資料として紹介され、同誌、同年四月号には藤田徳太郎氏によって追考が記され、更に翌昭和八年九月に日本古典全集・第四期「歌謡

集」中巻に全文が翻印されている。

その他三千点ほどにのぼる板本・写本の中には趣味家としての先生の御目にとまった珍本類がなお数えられるが、紙数の都合もあり、次項大内氏による連俳書の紹介にゆずる。(中野記)

本文庫の連歌関係のものは二十六点である。初めに作品の方からあげると次のようなものがある。

賦薄何連歌 卷子本 一卷(箱入) 室町末期写

「柴屋寺宗長筆 賦薄何連歌」の田村先生筆の貼紙がある。

発句「たかための卯花月夜ほととぎす」。宗長・宗碩両吟の百韻。

賦何人連歌 卷子本 一卷(箱入) 室町末期写

田村先生筆にて「水無瀬三吟」と貼紙。発句「雪なから山もとかすむゆふへ哉」。宗祇・肖柏・宗長三吟百韻。

賦初何連歌 卷子本 一卷(箱入) 近世初期写

箱書「連教師昌倪墨跡巻物」。元和九年四月十日玄珠亭にて興行。発句「世の人のいひはやす名や時鳥」。作者は昌球・玄球・玄仲・禅昌・昌倪・禅意・玄陳・慶純など十一人。その後「元和九年於三宮様御月次」の「賦何路連歌」百韻を録す。発句「花紅葉一本にみゆる若葉哉」。作者は公業・寿仙・善昌・玄陳・光理・円政・氏頭・昌倪・水・玄的・昌球など十三人。

賦何船連歌 横一冊 近世初期写

田村先生筆「石山千句」の貼紙あり。天文二十四年八月十五日興行。発句「諸人の年の花つむ若菜哉」。作者は着(西三条公経・金(大覚寺縁傳大僧正)・宗養・紹巴。千句連歌の第一巻。

賦一字畫韻連歌 懷紙一帖 写

正保二年閏五月八日興行。千句の第六卷。発句「かやり火は賤か
柄のしるへ哉」。作者は御作代・好重・形俊・一燈・良眼・治重・
快周・正範・快欽・実運・氏重など。

賦何水連歌 懷紙一帖 写

元禄十五年二月十三日興行。千句の第十。発句「老松も緑は春の
しるしかな」。作者は信盛・信亮・信兼・兼碩・快寿・快雅・就重
・心堤・実伝・快状・良眺・良門・快測・昌俊・昌英。

賦何人連歌 懷紙一帖 写

宝永三年十二月吉日興行。発句「照月や草木にかるき夜半の霜」。
作者は御作代・信仙・信盛・快雅・信賀・信伯・快鳳・氏仍・仙実
・信亮・快倫・氏直・昌英・良章。

賦何路連歌 懷紙一帖 写

享保八年五月九日興行。発句「実と成もけに花よりそ神の梅」。
作者は御作代・信恭・信亮・信伯・信芳・信廷・仙実・昌永・氏滋
・氏方・仙淑・仙増・氏治。

賦何鳥連歌 懷紙一帖 写

宝曆十三年十月二十六日興行。発句「一声はねぬ夜の夢か郭公」。
作者は知英・清喜・央昇・貞栄・徳栄・庸就・長眷・明主・英信・
孝次。千句連歌の「第四」。

賦何木連歌 懷紙一帖 写

宝曆十三年十月二十六日興行。発句「老ぬとも愛さらめやは秋の
月」。作者は長眷・知英・庸就・徳栄・貞栄・清喜・央昇・明生。
前掲「賦何鳥」と同じ千句連歌の「第十六」。

賦山何連歌 卷子本一卷 近世前期写

寛永三年三月十日法橋昌琢古今伝授竟宴興行。発句「開より花の
香ふかし家の風」。作者は色（八条色）・昌琢・梧（関白）・水齋松寛

・東（竹内門跡）・実顕・氏成・昌倪・玄陳・慶純・宗順・玄的・保
睦。

昌琢事古今竟宴連歌 卷子本一卷 近世前期写

寛永三年興行。前掲「賦山何」と同一連歌。但し「山何」の賦物
の記載なく、巻末に句上げを記す。

哥仙之連歌 卷子本一卷 近世初期写

発句「下草もめくみや深き梅の雨」。百韻一卷。作者名は御代・
二・三・四・五・六と略記。

宗因点連歌百韻 卷子本一卷 近世初期写

発句以下二十五句を欠く。二の折四句目「いと、露けき野辺の草
衣」以下を存す。作者不明。付墨は宗因。巻末「付墨廿九句 此内
長三 宗因（花押）」。

宗因点連歌百韻 卷子本一卷 近世初期写

田村先生筆にて「俳諧百韻 宗因点」と貼紙があるが、内容は俳
諧でなく連歌。発句「竹に生て聞の戸近し秋の風」。作者不明。付
点は宗因。巻末「付墨廿八句 此内長三 宗因（花押）」。

聖廟法楽千句 横本一冊 文化十五年写

明応三年二月十日興行。兼載独吟千句の付注本。奥書に

右正本之事内藤内蔵助藤原朝臣護道談儀之以証本令書写畢依為
秘蔵細字書付訖他見穴賢々々

右正本小野氏仍先生自筆以本書写畢 文化十五歳二月朔日

御供風信覚行歳十九歳

とあり、金子金治郎氏のいわゆる第二種注本で、小島居寛二郎氏本

(文政十三年七月書原信隆書写本)の依拠本に当たたるもの(「連歌古注釋の研究」)。

昌程連善千句 大本一冊 安永九年写

表紙打付け書き「日法千句」。日法は昌程の法名。追善の昌陸独吟千句で、第一巻賦何木の発句「冬の日のくるゝもまたてうき身かな」。但しその付注本。注者は次の奥書によると瀬川昌坪であることが知られる。

右千句者為妙心院昌程日法追悼昌陸法眼独吟之処也 武州瀬川

氏昌坪註之 元禄六癸酉年暮春廿五日

安永九庚子年孟春書写之 鶴鶴尚行

昌逸年並連歌集 大本一冊 近世末期写

天明六年より文政二年に至る三十五年間、毎年正月十一日に里村昌逸の立句によって興行された百韻連歌三十五巻を収む。

次に式自作法書をあげると左のようなものがある。

連歌新式 大本一冊 室町末期写(細巴筆)

箱書「法眼細巴連歌新式 一冊 外題近衛殿前久公御法名龍山御筆 極札有之」。琴山の同文の極札を存す。内題「連歌新式追加并新式今案等」。巻末に「文龜辛酉林鐘上澣 肖柏」とある。奥書は次のごとし。

此式目者芸州御本所奉応尊命書写畢一校之次記之者也 天正十

七年孟秋下旬法橋細巴(花押)

〔連歌作法書〕 大本一冊 近世初期写

新式の注本で、新式今案・和漢篇を付す。「文龜辛酉林鐘上澣 牡丹花」奥書本の転写本。

連歌手介遺筆 大本一冊 近世初期写

内題「連歌にてをは乃次第」。奥書は

此本者以宗長自筆之本令校合者也 右中弁藤(花押)

伊呂波新式 上 樹形本一冊 近世初期写

内題「今案色葉新職 上」。巻末に「伊呂波新式上 慈庵道字(花押)」とあり。後に「かすむ夜はむなしき月のゆく衝哉」を発句とする長慶・宗養・細巴三吟の賦何人百韻一巻を録す。

連歌新式 半紙本一冊 近世初期写

内題「連歌新式追加并新式今案等」。表紙共紙、「尾州名古屋大文字屋」の黒丸印あり。

連歌手本之事 横本一冊 近世中期写

聞書連歌新式追加并新式今案等 大本一冊 近世中期写

匠材集 横本四冊 寛永十五年刊

原題簽・丹表紙の美本。刊記「寛永拾五年孟夏吉辰刊行」。

以上のほかに「復古帖」と題する手鑑の中にも宗祇として

かすみに鳥のこゑは老ゆく

夕暮の日はうちくもり影もせて

たのめし物をそらもあはれめ

あひみすはいかになるへき我ならん

はかなやかかる恋をやめてよ

数ならぬ御祓河原のつらきせに

あらそふ道もたつる小車

武士はいくさの庭を心にて

ふみにはいつか身をもよせなん

いとけなき程はいさむるかひもなし

の自筆連歌懐紙の切れや、宗碩又は宗碩・宗長両吟のそれぞれの連

歌懐紙の切れが貼付されていることを一言しておく。

本文庫の俳諧関係の書籍は四百十余部の多数にのぼる。田村先生御生前にお伺いしたところでは、先生が福岡に御來任の頃には古書店の店頭でよく俳書を見かけられ、それらを手あたり次第に求められたよしであった。多分、本文庫の俳書の大半が、戦前の福岡市内で購入されたものと見られる。そのため九州俳書が多いのも本文庫の特徴であろう。紙数の都合ですべての俳書名を掲げるわけにもいかないで、おおよそ近世前期のもの、蕉門関係のもの、九州関係のもの、伝書などの類に分けて、主要なものを列挙し、必要に応じて若干の解説を加える。但し、書型は横本を横、半紙本を半のごとく略記する。又、年時は序跋等に見えるものなので、必ずしも該本の刊行年時を意味しない。特に後刷本の場合、刊行年時の推定は著しく困難である。

不二歌仙 岡西惟中自筆 卷子本一卷 近世初期写

発句「雪は頭巾物躰白しおやちの山」に始まる惟中独吟の俳諧歌仙。巻末に「右独吟の一巻依御所望揮毫了 一時軒(惟中の朱印) 望月更」とある。「近世文芸 資料と考証 七号」に紹介す。

大板独吟集 宗因批判 横二 延宝三年 刊

上のみ原題簽の一部を残す。下は虫害がややひどい。諸本との関係については未考。

しふうちは返答 上 惟中 半一 延宝三年 刊

増山井 季吟 半一 寛文三 刊

江戸戸倉屋板の後刷本。

増補はなひ草

小一 延宝六年 刊

わすれ貝 神風館連 半一 延宝七年 刊

東大酒竹文庫と伊勢神宮文庫に伝本を蔵するのみ。但し両本共に題簽剥落。神宮文庫本は「杉のむら立」の仮題で岡本勝氏による翻刻がある。(『国語国文学報』第二十九集)。本文庫本も題簽を欠き、田村先生筆の「わすれ貝」の紙片を貼付する。

江白堂 晩翠 横一 元禄三年 刊

備前岡山の晩翠一派の歳旦集。板本は他に正宗文庫に一本を蔵するのみ。

膝踏大成しんしき 鶯水 半一 元禄十一年 刊

膝踏婦多津物 蘭道 半一 元禄十四年 刊

伝本の多い本ではないが本文庫には版本二本を蔵する。但し二本を比較するにタテの長さに五耗ぐらいの差があり、かつ表紙の色を異にするので、初刷本と後刷本と見られる。

万句短尺集 和英 横一 宝永五年 刊

題簽「万句」のみを残す。田村先生筆の貼紙に「万句短尺集

岸本和英編 宝永五年成 弘文荘目錄第十九号四七頁 昭和二十五年四月」とある。柿衛文庫と天理綿屋文庫に板本を蔵する。

はらゝ子集 友墨 半一 正徳五年 刊

原題簽剥落。田村先生筆「はらゝ子集」の紙片貼付。第一丁柱刻「初丁 はらゝ子集 ゐつゝ屋板」とあるによると見られる。本文庫本以外に伝本を知らない。(岩波『国書総目録』にも未記載)、序跋を紹介しておく。

玉江の蘆のかりそめに思ひ出しか其道広くして浅水の翠くくに友墨の名を染めて今見る石の海となり山と成花ほとゝきす月雪の感此集に見よとか云ならし 正徳五天 中夏 言水序

跋 佐藤姓友墨子近曾渡步シテ北海ニ白山ノ雪籠石川ノ紅葉眺望之暇成テ滑稽ノ編集一也帰路ノ御袖ニ于一軸ヲ一采而強テ請レ
 跋雖ニ楚ニ不分ニ其ノ絲口ヲ一不得ニ固辞スルヲ後ニ加ニ俚語ヲ云爾
 吟花堂晩山

刊記は「昔正徳五乙未歳林鍾上澣 京 井つゝや庄兵衛板」。入集者に方山・鞭石・言水・昨囊・伯菟・字中・北枝・涼菟・晩山・雲鼓等の知名作家を見る。

友墨子旅宿のつれ／＼をとふ
 雲のみね雪もあれからあの心
 金北枝
 さ月のそら友墨子北州におもむくも
 此道深く染なんと志にやその末の栄こ
 とふきて

ことの葉のすゑ摘修行花も見む
 齒固やとは云さして水の恩
 言水
 淀のわたりのまたよふかきに
 言水
 高をより帰るさ
 言水
 はな帯のあひの紅葉や君か為
 言水
 河辺聞千鳥
 言水
 暮は妾にくつされてきく千鳥哉
 言水
 帝都の豊なる有さまを
 言水
 炬にねふる浪こそきかね須磨明石
 言水

等の言水句の入集を見るが、「ことの葉」は『元禄名家句集』未収句であり、「齒固や」「なかれさる」「はな帯の」「暮は妾に」は

享保二年刊の言水句集「初心もと柏」に見えるものであるが、これより早い出典を確認出来たことになる。「炬にねふる」は上五「炬の眠」の句形で正徳五年の「小太郎」に入集している。

次に蕉門関係の俳書では「冬の日」(半一)・「ひさこ」(半二)・「阿墨野」(半三)・「猿蓑」(上のみ、半一)・「すみたはら」(半二)・「続猿蓑」(半二)などの七部集の各板本が所蔵されているが、刷りのよいものは少なく、いずれも享保期前後の後刷本であろうと思われる。その他に

俳諧勸進帳 下 路通 半一 元禄四年 刊
 薄茶色表紙。原題簽。刷りの鮮明な本である。

桃の実集 元峰 半一 元禄六年 刊
 薄水色表紙。題簽中央剥落。打付け書きに「桃実集」と記す。元禄の板本は伝本が少なく国会・東大竹冷文庫・正宗文庫と本文庫本のみ。

深川集 洒堂 半一 元禄六年(寛政二年の西村版) 刊
 或時集 嵐雪 半一 元禄七年 刊
 句兄弟 其角 元禄七年(安永六年の聲明写本) 半一写
 枯尾華 其角 半二 元禄七年 刊
 元枯尾華 其角 半二(明治二十六年の永徳堂刻本) 刊
 有磯海 上 浪化 半一 元禄八年 刊
 芭蕉庵小文庫 上 史邦 半一 元禄九年 刊
 綠色表紙。原題簽。刷りの鮮明な美本。

篇突 彦根 半一 元禄十一年 刊
 濃紺表紙。原題簽。美本。裏表紙に「享保参戌五月吉日 泉屋」と墨書。「三松氏」の印あり。日田の旧家泉屋こと三松家の旧蔵

本。

弁篇突集 去来 半一 (江戸中期) 写

表紙・裏表紙を欠く。去来二百五十年忌記念展覧会に「旅寝論古写本」として出陳。巻末に「さかの、去来書 ゆき、坊写之」とある。ゆき、坊を往来坊連之とすれば、天明頃の筑前宗像の人。古典文庫「蕉門俳論集」に大内により翻刻済み。

宇陀法師 李由・許六 半一 (板本の写)

十三歌仙 曰良 半一 (板本の写)

巻末に「三花井 武篤写之」「あたらし庵」の墨書あり。

正風彦根鉢 許六 半一 正徳二年 刊

原題簽を有し、刷りも鮮明、初印本か。

続五論 支考 半一 元禄十二年 刊

俳諧古今抄 支考 半五 享保三年 刊

俳諧十論 支考 大三 享保四年 刊

和漢文操 支考 大六(序三四五七) 享保八年 刊

新撰大和詞 支考 大(上下)合一 享保十四年 刊

独こと 鬼貫 半二 享保三年 刊

去来抄 去来 大一 (先師評のみ) 文化十五年写

三草帚 土芳 半三 享和元年 刊

本文庫の九州関係俳書は四十余部であり、その中には他に伝本を知らぬ珍しい本もかなりある。

西の詞集 釣壺 半一 元禄十四年 刊

編者は豊後日田の人、吉弘氏。本文庫の他に柿術文庫・天理綿屋

文庫に板本を所蔵するのみ。

枯のつか 晴川 半一 宝永二年 刊

編者は筑前箱崎の隠者、十里庵(松月庵とも)。芭蕉塚(馬出に現存)建立の記念集で、他に伝本を知らない。杉浦正一郎先生によって九大「文学研究 第四十五輯」に翻刻。

漆川 土明 半一 宝永二年 刊

編者は筑前漆生の人、野見山氏。四方郎朱拙の後見俳書の一。本文庫本以外に伝本は知らない。杉浦正一郎先生によって九大「文学研究 第四十六輯」に翻刻。

門司硯 程十 半一 享保十三年 刊

門司硯 甲 程十 半一 享保十三年 刊

編者は小倉の人。野坡門。一冊本と甲乙(上下)二冊に分かった本とがあり、一冊本が初版であろうとの田村先生御生前のお話であった。鹿大「文科報告 第八号」に大内により翻刻。

此如月草 枕山 半一 延享四年 刊

編者は長崎の人、勝木氏。西行五百五十年忌ならびに三千風追善集。表紙裏に「厭吾亭苔路」の墨書があり、筑前内野の荒卷苔路の旧蔵本であることが知られる。

宿の花 下 里舟 半一 寛延四年 刊

編者は筑前赤間の人、松尾氏。野坡門。下巻のみを本文庫には二部所蔵する。杉浦先生旧蔵本も下巻のみで、上巻は未発見。

松の響集・波樹集 宇麦 半一 宝暦四年 刊

筑前芦屋の吉永素蝶・芦洲父子の追善集。本文庫本以外に伝本は知られない。義仲寺叢書第一輯として大内により翻刻。

松のつばみ 清江 大一 宝暦四年 写

編者は筑前福岡の人、その書齋を無言室と号し、その名に寄せて大坂ならびに西国筋の諸風子に発句や文章を求めたもの。淡々の句を巻頭にその一派および野坡流俳人の作を収める。跋文は湖白庵浮風。他に伝本は知られない。

なつよもき 下 佳方 半一 宝曆五年 刊

佳方の九州行脚記念集。天理綿屋文庫本も下のみで、上の伝本は未だ世に知られない。

恋の春 上 浮風 半一 宝曆六年 刊

朱白集 上 浮風 半一 宝曆十二年 刊

龍門瀑布 古桂 半一 宝曆十一年(可雲の明和五年写)

編者は豊後玖珠の人、長野氏。巻末に「明和五年子文月中旬可雲(印)」とある。板本の伝本は稀少。

その行脚集 上 諸九尼 半一 宝曆十三年 刊

高津野翁二十五回 江棧 半一 明和四年 刊

編者は福岡の刀鍛冶信国大和守俊寿。野坡の追善集として他に伝本は知られない。文雄序。文下跋。「追加」の中に

百生りにおもふ形なし後の月 浅生

の句が見える。

五色水 杏扉 大 明和五年 写

編者は福岡の人、山崎氏。野坡高弟杏雨の息。享保十二・十三の二年間、来遊した野坡と福博連衆の発句や一座した連句の山崎家に伝存していた句稿を、杏扉が年代順に整理筆写したもの。「不明、

一」「鹿の足 二」「冬木立 三」「萬の宿 四」「百の赤子

五」「下つゝし 六」の六巻から成る。本書の内容から当時の野坡の動静を整理した田村先生の便箋が貼付されているので次にあげて

おく。

「巻一 享保十二年仲夏(五月)十二日

全 名月(八月十五日)十六夜

巻二 享保十二年 九月廿八日

全 十月廿四日

全 十月廿五日野坡怡土郎へ出発

全 十一月七日青陽堂に帰る

巻三 享保十二年 十月廿六日

全 十一月五日 野坡留守中

巻四 享保十二年 十一月十八日

全 十二月十四日

巻五 享保十三年 歳旦

全 上巳(三月三日)

巻六 享保十三年 三月廿一日

全 重陽(九月九日)「

雪見舟 杏扉 半一 明和五年 刊

編者の両親である杏雨並びに市女の追善集。

珠のしぐれ 可雲 半一 明和七年 刊

編者は筑前甘木の人。紫城庵市遊の一周忌集で、他に伝本を知らない。

青幣白幣 上 計圭 半一 明和八年 刊

編者は筑前春吉の人。野坡門。宮崎・住吉・宰府の三社奉納集。下のみ福岡市の吉永家に所蔵されており、両書を合わせて本集の全容が明らかになった。

肥後 熊本斜日門 横一 明和八年 刊

筑後 柳河連中 横一 明和九年 刊

春賀 龜翁山連中 横一 明和九年 刊

嶺の雲 杏扉 大一 明和九年 写

杏扉の独吟俳諧千句。頭注を付す。追加として諸九・杏扉・計圭・文離・宇白五吟百韻を収める。他に伝本を聞かない。

秋かせの記 諸九尼 中一 明和九年 写

卷末に「安永七戊戌歲閏七月吉旦写之 千原錦川」とあり、錦川は豊後日田の人。秋かせの記の写本としては最も古い。

松の林 杏扉 半一 安永七年 刊

原題簽、紺色表紙の美本。「林直増家蔵」の印記あり、伝本は題簽を欠く筆者架蔵本と二本のみ。

散花集 我山・巴文 半一 安永七年 刊

編者は共に小倉の人。春渚の三回忌集。自在庵序、杜秋跋。巻頭に春渚の画像を掲げる。伝本を他に聞かない。

鉢童 吾調 半一 天明元年 刊

編者は豊前落合の人、五調に同じ。遊五門。自序、巻末に御状致拜見候御堅固之由珍重奉存候然者御知因之句書着被成候由にて愚吟も遣候様被仰下即三四句進申候浪速ニも余分遣候

へハ若同句出板之義も難計候且ツ集亨之儀風流面白奉存候折節
船之衆差急れ早々申残候 已上

卯月三日

五調様

風律

美しき事も忘れて花見かな

花のある木とも犯す杜若

の手紙を跋文に用いる。他に伝本を知らない。

とも鶴 釣鯤 半一 天明三年 刊

釣鯤は杏扉の後号。一枝序・自序。有良々亭跋。

松和翁遺吟 半一 天明六年 刊

松和は黒田藩士杉山運仙、その一周忌集。釣鯤の誄につづけて松和の句文を収める。伝本を聞かない。

筑前 博多俗仙庵連中 横一 寛政三年 刊

蕉翁百回忌 蝶醉 半一 寛政五年 刊

鉄練花 上 不山 半一 寛政五年 刊

不山は杏扉(釣鯤)の後号。杉浦先生旧蔵本に「下」のみあり、本文庫本と合わせて本集の全容が明らかになった。

一夜桃 良山 半二 寛政六年 刊

豊肥紀行 青如 中一 寛政六年 写

静心集 仙李 半一 文化二年 刊

三仏会 玉屑 半三 文化八年 刊

筑紫員 魯白 半二 文化八年 刊

自由庵飄風句集 大一 文化十二年 写

飄風の吟のあとに対竹・萬三・飄風三吟「梅か香や」の歌仙並びに諸家の句を録す。その中に次の句が見える。

姨捨し奴もとこそその草の露 粟米 一茶

卷末に「文化十二丑十月廿九日写 松島月国」とあり。

ふた葉の霜 魯杏 半一 文政五年 刊

春の雪 沸水 半一 文政七年 刊

夕ぐれ集 坤 飄風門下連 半一 文政十一年 刊

散さくら 筠庵 半一 文政十二年 刊

対馬の曙堂の追善集で、その遺稿をも収録。他に伝本を聞かない。

い。

四川扇集 通玄 半一 文政十三年 刊

長崎の祥天十三回忌集。海雲序、蒼虬跋。他に伝本を知らない。

武芝集 高居 半一 天保四年 刊

折華集 士焉 半一 天保五年 刊

秋風庵文集 月化 大二 天保十一年 刊

夢塚集 斗丈 半二 天保十四年 刊

うめかた集 吳石 半一 嘉永七年 刊

としくらへ 涼翠 半一 明治二十年 刊

編者は豊後杵築の人、小畑氏。その八十賀集。芹舎序。

後枯野塚集 市睡 半一 明治二十八年 刊

伝書の中にも珍しいものが若干見受けられる。

白砂人集 小一 近世中期写

辻井版に比べると十五丁裏「秘書要決」がない。又字句にかなりの

の出入りのある部分を含んでおり、奥書に「右一卷者当家雖為秘書

依師弟因不浅相伝畢努々外見有間敷候 長頭丸在判」とある。

草むすび 中一 近世末期写

野坡系の伝書。表紙裏に「宮本院快山」、巻末に「遠智懸(つゝ) 古賀

蝸室 可笑亭小字写」とある。全文を古典文庫「蕉門俳論集」(矢内福)

に翻刻すみ。

俳諧伝書有や無やの関 大一 延享四年 写

本文庫には明和元年の板本も一本蔵しているが、これはそれより

も十数年を溯る写本。序文の桃青の署記の代わりに「落鷹亭千那」

とあり、本文も諸条目や例句に板本と甚だしい差異があり、巻末に

「東都之俳林芭蕉三世 鷹亭 (甲) 延享四年春 清明女 伝子里

中」此一巻者先師東武の風羅房より伝得られたる秘中の秘にして世俳の人は是を知る莫なし夢々俳話する事なかれ 穴賢」とある。

乙由伝 茂秋・春波 大一 江戸中期写

俳諧秘伝集 半一 寛政十二年写

相伝名目・二十五条・無尽符応伝を含む。

俳諧十論弁秘抄 乾坤 半二 江戸中期写

近世中末期の俳書は百八十余部ほどあり、その中には

新華摘 蕪村 大一 寛政九年 刊

の美本など珍しいものもいくらかあるが、もはやそれらを紹介する

紙白もないし、未調査のものもあるので筆を止めることにする。

なお、本文庫には和歌や連歌を含めて四百枚をこす短冊が蔵され

ており、特に「松年帖」と題する短冊帖(折本一冊)には宗鑑・季吟

・宗因・西鶴・惟中・素堂・捨女・言水・野坡・蝶夢・風律・月居

等のものがある。

万代やつもる砂の山の春 宗因

ゐる鶯の羽風も青し夕さ苗 宗因

東よりのぼるとて

夏帯やすゝかのみそきせしめ繩 梅翁

八重葺の花おし春のくれとゝめ 西鶴

玉櫛寄親のとり置踊哉 言水

田村先生は、俳諧は自分の専門外だとよくおっしゃっておられ

た。しかし、先生には早く「秋風庵月化」(『近世文学の研究』昭和十

一年発行)のすぐれた御研究があるのであり、これら多数の収集俳書

を拝見して、近世庶民文芸たる俳諧に寄せられた先生の並々な

らぬ御関心と御見識の高さを、改めて深く感じたことであった。

(大内記)

受贈図書 (昭和五十一年四月～五十二年三月)

日本文芸論集 (北住敏夫教授退官記念)

東北大学文学部
国文学研究室

歌学資料集成 (静嘉堂文庫所蔵)

雄松堂
新典社

十六夜日記

新典社

百人一首 (兼載筆)

〃

近代秀歌

〃

源氏物語修紫田舎源氏比較論攷

佐藤 包晴

日本庶民文化史料集成 第八卷

三一書房

古訓古事記 (訂正)

新典社

金槐集 (市立函館図書館蔵)

〃

方丈記 (影印本)

〃

御所本三十六人集 (宮内庁書陵部蔵) 2 5 15 21 24 卷 (解説共)

〃

百人一首 (影印本)

〃

日本散文選

〃

日本文学史 (作品中心)

〃

日本詩歌選 (改訂版)

〃

近代女流の文学

〃

とほすがたり

〃

芭蕉・近松・西鶴

〃

出世景清 (大倉文化財団蔵浄瑠璃本)

〃

古今和歌集

〃

小倉山庄色紙和歌 (百人一首古注)

新典社

懷徳堂文庫図書目録

大阪大学文学部

契沖全集 第16巻

岩波書店

かたこと (笠問還書53)

白木 進

詩語解・文語解並に索引 (釈大典)

中村 宗彦

国文学研究文献目録 (昭和48年)

国文学研究資料館

山口福岡両県接壤地域言語地図集

岡野 信子

国語史資料集

春日 和男

みみらく史考

入江 孝也

とりかへばや 1~4 (解説共)

(新典社版原典シリーズ)

10 11 17 18)

今井 源衛

芭蕉と奥の細道とところどころ

小島 吉雄

近世演劇論集

横山 正

九州のコトバ

吉町 義雄

全人的 (歌集)

手島 一路